



ドキュメンタリー映画の世界から

あいだを撮る 人間を撮る

2020年12月9日 宍戸大裕

<自己紹介>

宍戸 大裕

映像作家 1982年仙台市出身。学生時代は国語国文学科で古典文学を専攻。6年時、映画監督やカメラマンが主宰する映像グループ「風の集い」に参加。卒業して1年間アルバイトをしながら映画製作。07年、障害者の「自立生活運動」に出会う。10年、東京山谷の福祉施設ではたらきはじめて半年、東日本大震災が発生。地元宮城へ帰り、被災した動物とひとの撮影をはじめ。退職し映画製作の道へ。



- 2008年 「高尾山 二十四年目の記憶」(40分)
- 2013年 「犬と猫と人間と2 動物たちの大震災」(104分、劇場公開)
- 2015年 「風は生きよという」(81分、劇場公開)
- 2016年 「百葉の葉 さやま園の日日」(104分)
- 2018年 「道草」(95分、劇場公開)

<映画「道草」>



<イントロダクション>

暮らしの場所を限られてきた人たちがいる。自閉症と重度の知的障害があり、自傷・他害といった行動障害がある人。世間との間に線を引かれ、囲いの内へと隔てられた。そんな世界の閉塞を、軽やかなステップが突き破る。東京の街角で、介護者付きのひとり暮らしを送る人たち。タンポポの綿毛をとばしブランコに揺られ、季節を闊歩する。介護者とのせめぎ合いはユーモラスで、時にシリアスだ。叫び、振り下ろされる拳に伝え難い思いがにじむ。関わることはしんどい。けど、関わらなくなることで私たちは縮む。だから人はまた、人に近づいていく。

<知的障害者のひとり暮らしとは？>

知的障害がある人の暮らしの場は少しずつ広がっていますが「重度」とされる人の多くは未だ入所施設や病院、親元で暮しているのが実情です。そんな中、2014年に重度訪問介護制度の対象が拡大され、重度の知的・精神障害者もヘルパー（介護者）付きでひとり暮らしが出来る可能性は大きく広がりました。この街で、誰もがともにあるために。あたらしい暮らし方をはじめている人がいます。

【予告編・2分】

<映画のはじまり>

○きっかけは岡部耕典さん（リョースケくんのお父さん）

「重度訪問介護制度を使って支援者付きひとり暮らしができることを講演などで話しても信じてもらえない」「制度は使われなければ衰退する」

→映像で打開してほしいと声がかかる。

○2016年、知的障害者入所施設「さやま園」（東村山市）で1年半住み込み、映画製作中。

入所者の女性のひとりが、自傷・他害行為が頻繁になり退所を余儀なくされたが行き場が見つからない。親元では難しく入所、しかしそこにも居場所がない。

→どうすれば彼女の生きられる場所が見つかるのか、悩んでいた。

○リョースケさんと介助者に初めて出会う

→こんな風に暮らせるのかという驚き。

この暮らしができれば彼女も生きられる場を見つけられるかもしれないという思い。



< 道草 当事者本人から受けとるもの >

【面白さ】 チャーミングな人柄に惹かれる

- ・リョースケくんの「人心掌握術」、ヒロムくんの「サービス精神」
- ・「言語」が少ない当事者と介助者との間にたちのぼる風、軽妙洒脱
→“人間”がみえてくるのではないか
- ・自然描写とともに、いのちの営みを捉えたい



【難しさ】 知らない世間に引かれる

- ・自傷、他害行為は緊張する場面。どこまで見せられるか。
映像の影響力が強く、そこにいない人、知らない人にとっては逆効果になるおそれ

< 道草 支援者から受けとるもの >

【面白さ】

- ・前知識なし、自分なりのかかわり方で本人に出会う
- ・だれが「当事者」でだれが「支援者」かわからない
- ・かかわりつづける つづけてみる 粘ってみる



【難しさ】

- ・暴力や暴言をうけることも
- ・他者、世間からの非難

→自分が問われる地点。どうぐり抜けていく？



- ※ 東京山谷のNPO法人「ふるさとの会」で半年勤めていた経験
- ※ 道草風には
かわす、笑う、深刻にしない、“ぼちぼち”と

<反響 前例を超えるため、つくるため>

【肯定的】

- ・こういう暮らし方があることを知ることができた
- ・のびのびした暮らしがよかった
- ・介助者が魅力的 etc

【批判的】

- ・親として脅かされる
- ・子どものこれからを考えると怖くて仕方ない
- ・支援者が勉強不足
- ・施設を否定的に描いている etc

○あらたな前例をつくるために

悩みや不安をとともにかんがえ、意見を交わしあう場を持ち合いたい
ひとりひとりのみちゆき、これまでをすべて肯定しこれからをとともにかんがいたい

尾野夫妻が息子一矢さんの生活相談に事業所をおとずれた時のこと。

「まあご本人はね、それなりにたぶん、今までも幸せに暮してるのかもしれないですけど、これから別の形の可能性もあったらより、楽しい生活がもしかしたら」（末永さん）



<痛みをとものにしようとすることで連帯の可能性が生れる>

○本人の痛みを想像した時

ユウイチローくん3度目の入院中、お見舞いに行くと顎の辺りに血の跡。「ひげ剃りで切ったの？」と聞くと「かきむしった」と。「いい人」でいたら外出できると精一杯落ち着いた様子をアピールするも自分で自分を抑えられない。ベッドしかない閉鎖病棟の個室で病衣を着て青白い顔をしてひとりですごしていた。

「彼らは自分の人生に不安を抱いている人間なのです。
漂流して傷ついている状態です。」（大川さん）

○親の痛みを想像した時

「パニックになると噛む、蹴る、ひっかく、つつく、ていうのが全部揃ってくるので。
なるべく下の子をケガさせないように、噛ませて逃がすみたいな感じだったので」
（桑田貴江子さん）



<映画の役割>

1. 映画はものがたる

強者・勝者ではなく、悲しみや苦しみ弱さに立ちながらそれでも生きていこうとする市井の人の誠意、ひた向きさを映すもの。応援歌を。

2. 映画は遅れてやってくる

過去、あるいは現在を映しながらも、完成するのは数か月・数年先。
ドキュメンタリー映画だからこそできることは？

※「不知火海巡回上映会」(土本典昭監督、76～77年、天草・カナダを廻る)
水俣病患者のあらたな発掘。



よりよき世界のため、すべての存在が尊重される世界を
いたみをともしながらともにすすみたい

ご清聴ありがとうございました

